

新しい詩の声 2022 (第6回)・作品

〔最優秀賞〕

## 麻生 藤

### 星の息吹

遠浅に浮かぶ廃線を歩いた海原行きの前五時  
足元の瑠璃紺のひかりイソヒヨドリの鳴き声に  
ようやく夜明けを知る

深呼吸したあと 口元をほころばせて  
ながい道のりでしたね そう交わすとある夢の話  
その傍らにいま旅を終えた藻が流れ着いて  
サンゴのかけらにもたれかかった

途方もない時間の地層のなかで  
突然ひとは彗星になり石になり  
あるいは深海へ向かう人魚となり  
うつくしい植物の肌を這う雨になり  
やがて蒸発して空に還っていく  
この命の鼓動の変転は

星がまばたきをする一瞬の現象

この夜空を輝かせているのは  
わたしたちではないかしら  
それぞれの小宇宙 重なりあった星たちの明滅が  
わたしたちのことばとなってはばたく

令和二年あれから雪を被ったながい時間  
失ったたくさんのものが凍てついて霜となり  
こころを引き留めようとしてくるけれど  
きつとすぐに あるべきかたちに雪解ける  
世界にあまねく広がってゆく  
あたたかい時の流れは  
未来へ向かう舟 その曳波にうつるひかり  
手を引かれたその先にわたしたちは進む

〈優秀賞〉

## 田辺 なつき

### 呼吸

わたしの吐く息のしろさは

街灯のひかりに撃たれながら

分解され とうめいになり

ちいさくなつたけむりは明滅しながら

乳白色のひかりをはなつ

(それはわたしのぶんしんで

ひとつひとつがうちゅうのようで)

植物の息とまざり

昆虫の

動物の

土や太陽の

あらゆる息とまざりあい

とうめいな宇宙の一部になる

(それはわたしのせいめいで)

過去とかんじるものなかで

せわしなくはたらきながら

植物のなかでひかり

昆虫の

動物の

土や太陽の

あらゆるものなかで明滅しながら

銀河とよばれるなかで

天の川とよばれる星々のなかで

しずかに宇宙をつくる

そして わたしはひとつの呼吸をする

〔優秀賞〕

## オノ カオル

### おなじ空のした

曇った空の向こうから、光の粒が見えた。

粒はみるみる大きくなって、戦闘機になった。

そうして、ミサイルを撃ち込んだ。

子どもが泣き叫ぶ声が聞こえた。

笑い声でしたので振り返ると、

息子が飛行機のおもちゃで遊んでいた。

泣き声と笑い声は、どこか似ている気がした。

地下室で身を震わせる子どもたちを置いて、

息子の手を引いて外へ出た。

雨上がりの公園には誰もおらず、

洗われたように世界はきれいだった。

泣いている兵士を見た。

国歌のトランペットを聴いた。

僕は逃げまわる息子を追いかけ、

その身体を抱き上げ、その笑顔を抱き締め、

冷たくなってしまったすべてを温めた。

家に帰ってもまだ、戦争はつづいていた。

丸腰の老婦が、武装した兵士に詰め寄る。

ヒマワリの種をポケットに入れておきなさいと。

あなたが倒れたら、そこに花が咲くのだからと。

僕は見たくないと思った。

悲しみで咲く花など。

夜になっても、攻撃はつづいた。

焼夷弾が闇夜を照らす。

キレイだねえと、息子がつぶやいた。

僕は月のない、夜空を見上げる。

真つ暗な空の向こうに、光の粒が見えた。

〈優秀賞〉

## 潮江 しおり

### 最果て

寄せては返す

か細い汀線に

どこまでもひとりだから

あなたの乾いた手のひら

思い出して

私が私であること

忘れたくなる

あなたのいない平らかな世界に

波の端を辿れば

大小の貝殻欠けて

足元でざりざりと鳴った

白い陽射しを掬って瓶に詰めた

あの美しい巻貝

どこに失くしたのだろう

柔らかな砂に素足をうずめ

私だけが

ここに留まっている

打ち寄せる波の抱擁に似て

偲ぶたび

あなたの気配が匂い立ち

また消える

声より

まなざしより

なお柔らかな光

あなたと私の間に横たわっていた

透明な揺らめきは

やがて眼裏に薄らいで

最果てに

まっさらな朝が佇んでいる

## 受賞のことば・受賞者略歴

### ●最優秀賞

麻生 藤

#### 〈受賞の言葉〉

いま、わたしたちの生き方を形作る要素の一つには、間違いなく「令和二年」というきっかけが存在しています。

波のように満ち引きを繰り返す後悔や寂しさ、不安や虚無感。幾星霜にも感じられたその孤独のなかで、わたしたちが「ひとり同士のつながり」で生みだしたそれぞれの星。

その銀河が、停滞していたこの時代と、これから先の未来を照らす暗夜の灯となりますように。そう願って書き上げた詩です。

この度は「星の息吹」を選出していただき、誠にありがとうございました。

#### 〈略歴〉

1993年、沖縄県出身。沖縄国際大学総合文

化学部日本文化学科卒。現在は図書館司書として勤務。

2017年より「万河・Bang a」の同人として詩作を始める。その他、琉球新報「琉球詩壇」掲載。今回が初受賞です。

### ●優秀賞

田辺 なつき

#### 〈受賞の言葉〉

寒い冬の日に、自分の吐く息があまりに白かったことに、どこか不思議な感情を持ち、それを言葉にしたいということが「呼吸」を書く動機となりました。私の故郷では熊野古道に那智の瀧のような美しい自然があります。反して水害などの恐怖も体験しました。その事が自然の幽艶さ、趣、そして畏怖の念を抱くことになり、私が「呼吸」を書く動機にもなっているのだと思います。

このたび光栄な賞にお選びいただきありがとうございました。

#### 〈略歴〉

1995年、和歌山県那智勝浦町に生まれる。  
千葉県船橋市在住。

職業はシステムエンジニア。

「第29回岐阜県文芸祭 入選」

●優秀賞

オノカオル

〈受賞の言葉〉

1年が経ち、息子は2歳になりました。  
感情表現もずいぶん多様になりました。

片言ではありますが、言葉も頑張つて喋ります。

あんなに見つけにくい昼間の月も

息子はいとも簡単に見つけだし、

とてもうれしそうに教えてくれます。

アンパンマンと同じくらい

バイキンマンが大好きで、

三度の飯より散歩が好きです。

おそらく、たのしくて仕方ないのだと思います。  
目に映るすべてがあたりしくて。

だからこそ、こう思います。

自分の目に飛び込んでくるこのおぞましい世界が、  
息子の見つめる世界になりませんように、と。

とある日のニュースの放送中、

アナウンサーが声をつまらせ、涙を滲ませました。

多数の民間人の遺体が見つかった地域の部隊に

「偉大な英雄的行動」と名誉称号が授与された。

そんな内容のニュースでした。

中立で冷静でなければならぬはずの彼女の涙は、  
もう一度、痛みを思い出させてくれました。

この世界のやり場のない怒りや行き場のない叫び  
が

音もなく埋もれてしまわないように。

銃を持ってない代わりにペンを構えて、

誰かの痛みに自分が鈍感にならないために。

そう思つて書いた詩です。

〴〵やさしい〴〵詩を書きたいという気持ちは、

何ひとつ変わつてはおりません。

〈略歴〉

1982年東京都生まれ、北海道札幌市出身。

2003年に渡亜。

上智大学外国語学部イスパニア語学科を卒業。

コピーライター、17年目。

第5回「新しい詩の声」優秀賞。

〴〵書き続ける〴〵という約束は、かろうじて守られています。

● 優秀賞

しおえ  
潮江しおり

〈受賞の言葉〉

この度は、拙作「最果て」を優秀賞に選出ください誠にありがとうございます。選考委員の皆様方に心より感謝申し上げます。

私が詩作を始めたのは三年前のことでした。自分の内にある多重の苦しみと向き合う中で少しずつ心境にも変化があり、この作品を書いた時には、私の悲しみがひとつの分身として剥がれ落ちたような安堵を覚えました。誰かを思うこと、忘れようとすること、忘れてしまうことなど思いながら書きました。

拙い作品ではありますがこのような形で目を留めて頂けたことを糧として、今後も精進して参ります。ありがとうございました。

〈略歴〉

1988生まれ。滋賀県出身。

第16回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞。これが初めての受賞です。



# 作品公募の概要

星善博

日本詩人クラブでは、日本全国の幅広い方々と作品公募をとおして連携し、詩文化の普及と発展に寄りたいと考え、新しい詩人の発掘を目的に2017年から「新しい詩の声」の公募を始めました。今回で6回目となります。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない方を対象としています（会友の方は応募可能です）。

応募作品の中から、最優秀賞1篇と優秀賞を2ないし3篇選び、賞状・賞金を授与するとともに、日本詩人クラブのホームページに、公募状況と受賞作品、選考経緯、授賞式の模様などを、また、「詩界通信」にも選考経緯、授賞式の様子などを掲載します。

第6回「新しい詩の声」には、北海道から沖縄まで幅広い地域から192名の応募がありました。年齢も、10代、20代の若い方々はもちろん90代の方からのご応募もいただきました。最年少は10歳、

最高齢は94歳の方でした。

今後、受賞者以外の応募受付者全員に作品の寸評をお送りする予定です。なお、詩をさらに深く学び、詩を語り合う「フォロワーアップセミナー」につきましては、新型コロナウイルス感染症の収束が見極められない状況にあるため、皆様の安全を最優先に考え、見送りとさせていただきます。

## 選考経過報告

星善博

今回の選考委員は、秋元炯、天野英、網谷厚子、高島りみこ、星善博（委員長）の5名（五十音順）が務めました。

まず予備選考では、192名の作品から各委員が4月10日(日)を締切日として、メールにて3ないし4篇を推薦することになりました。その結果、予備選考通過作は次の13篇となりました。（敬称略・五十音順）

麻生藤 「星の息吹」

伊溪路加 「流線形」

江口久路 「ひとふでがきの呼吸法」

オノカオル 「おなじ空のした」

小幡幸子 「田舎の夏の宵」

後藤順 「三陸にて」

潮江しおり 「最果て」

白神つや 「いんたーねつとえくすぶろード」

竹原ツブオ 「摩天楼のネガのような」

田辺なつき 「呼吸」

新里輪 「夢車」

ヨクト 「小瓶の中に」

吉岡幸一 「とまりゆれる」

このうち、重複して推薦があったのは「星の息吹」「おなじ空のした」「呼吸」の3作品。それぞれの作品に3名の委員から推薦があり、この結果を参考に、4月24日(日)、日本詩人クラブ事務所に選考委員会が行われました。

まず初めに、重複して推薦のあった3作品については、予備選考の結果を尊重して残した上で、

5名の選考委員それぞれがいちばんに推したい作品を、理由を述べて挙げることにしました。結果は次のとおりです。「星の息吹」「おなじ空のした」「呼吸」「田舎の夏の宵」「最果て」「摩天楼のネガのような」、以上6作品。

これを踏まえ、さらに十分議論を尽くした上で、挙手により最優秀賞を決めることにしました。結果は、麻生藤「星の息吹」に選考委員全員の手が挙がり、最優秀賞と決定しました。

次に、最優秀賞を逃した5作品の中から優秀賞3篇を選出することにし、一人3篇を選び、それぞれ3点、2点、1点と得点をつけ投票することになりました。この結果、田辺なつき「呼吸」13点、オノカオル「おなじ空のした」6点、潮江しおり「最果て」5点となり、上記3作品が優秀賞と決定しました。

今回惜しくも受賞に至らなかった竹原ツブオ「摩天楼のネガのような」、小幡幸子「田舎の夏の宵」も、独自の詩的世界を持ち、読みごたえがありました。また、応募された数多くの作品から、

詩の裾野の広がりを感じ取ることができました。  
まもなく、第7回の応募が始まります。優れた  
個性ある作品と出合えることを楽しみにしていま  
す。

## 選考委員

秋元炯・天野英・網谷厚子・高島りみこ・星善博

(委員長)